

筑波大生の『国語力』の問題点について

石塚 修

文芸・言語学系講師

はじめに

筑波大生の「国語力」はどの程度かという問題を、客観的データに基づき分析して述べることは難しい。そのための経費や労力は、到底一人で賄えるものではないからである。また、そもそも「国語力」とは何かという明確な定義づけなしに、その調査項目すら作成できまい。

ただし「国語力」を、少なくとも「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の3領域として述べることは可能だろう。今回は、毎年約500人の学生に共通科目等「国語」を講義をする中で、私なりに観察してきた彼らのその範囲での「国語力」の実態を報告し、課題への回答としたい。

新聞も読まない大学生

筑波大生の新聞購読率が、現在どの程度であるか厳密に調査した教員はいるだろうか。私が講義の中で拳手により尋ね

た結果からは、多くとも約40-30%程度であると推測している。しかもこの数値は私の着任以来5年間、確実に低下してきている。学生宿舎での新聞購読率を調査すれば、より精密なデータをとることは可能であろう。新聞を購読していても、テレビ欄程度しか読まない学生もいるから、実際に新聞をきちんと「読んでいる」率を、調査するのは難しいかもしれない。

ひと昔前は「新聞が読める」というのが、「読む」力の社会的基準の一つであった。現代において、それがどの程度「学力」の基準になるのか疑問だという見解もあろう。テレビやインターネットを利用して情報を的確に「読み」、そして処理できれば新聞など「読む」必要もないとする考えも、確かに肯ける。

だが、私が問題としたいのは、新聞を購読しない理由が、「お金がもったいない」とする学生が多い点である。「情報」

は我々が意図的に入手し自己内に取り入れて、初めて「情報」となりえる。つまり、新聞を「読む」ことに投資を借しむと言うことは、もしかすると筑波大生が真の意味での「知的好奇心」を放棄していることに繋がっているのではないかと考えるのである。彼らが新聞購読料を惜しんでいても、「好奇心」を持って他のメディアを駆使して「情報」に接し、様々な社会のことがらへの関心を持ち、思索をめぐらしてくれてさえいれば何ら問題はない。しかし講義中に、新聞に書かれている程度の社会的話題を提示しても、狐につままれたごとくなる彼らの姿を見ると、どうも「知的好奇心」が横溢しているとは思えないのである。

たとえば、あるクラスで、新聞で最近よく話題になっている「CEO」「ATM」「OPEC」「IMF」「PKO」の略号の意味を質問したところ、全問答えられたのは120名中10名のみであった。理系の学生にいたっては1問も回答できない者もいたのである。

これはC・Pスノーが「二つの文化と科学革命」(1959)で指摘した「教養の分裂」を示している。今年度の「国語Ⅰ」では試みに、文理系「教養」の基礎知識問題を25問作りマークシート調査を実施してみたので、その結果もいずれ機会を

見て示したいと考えている。

新聞すら満足に「読め」ない学生が、新聞以上の語彙で「書か」れている学術的著述やそれに準ずる文章を「書ける」かといえば、それは無理な話であろう。

新聞こそ読んでいないが、学生たちは主体的に何かを「読み」、自分の「ことば」の育成に励んでいるはずだという反論を持った方もいよう。その方は、ぜひとも講義中に「何でもいいからカバンから教科書以外で持ち合わせている書物を出せ」と言って調べられるとよい。教員が学生るとき「読み」親しんできた、典型的な学術的入門書としての「新書」「文庫」の類を持ち合わせている学生は、おそらく10人中1人か2人であろう。課題で出されれば「読む」が、自主的にとなると壊滅的なのである。さらに、そのことをとがめると、きまって「何かいい本を紹介してくれ」とせがむだろうことも予測の中に付け加えておく。

一見盛んに活用していると見せかけているIT媒体は、「ケータイ」という「オトモダチ」関係維持装置やPCという玩具に他ならないのである。それは、講義中に机の下でうごめく彼らの手の動きの激しさを注意深く観察されている方には、充分すぎるほどお分かりだと思う。

「ことば」を「読む」「書く」以前に

「ことば」にたいする好奇心がない。その実態は物理学者の本間三郎氏が言う、科学に必要な「分析・統一・法則化というの言葉があって初めて可能である」（讀賣新聞2000.5.3）という点において、「科学」にたいする基本的姿勢の欠如とも連絡するといえる。

彼らの「ことば」への関心は「オトモダチ」による「ウワサ」であり、「アノ人ッテ〜ラシイ」と言われる不安を「ケータイ」を駆使して懸命に解消しているに過ぎない。その「根拠」を訊くと、およそ挙げられるのは「トモダチ」・「センパイ」なるきわめて曖昧な存在なのである。

私が講義で、執拗なまでに彼らに「根拠」の「明示」を求めるのは、そうした「ラシイ族」の追放こそが、彼らを大学教育を受けた知識人・教養人としての第一歩を歩ませることになると痛切に感じているからである。雪博士の中谷宇吉郎の随筆「1 駅の一晩」（1946）に描かれている、戦時中の片田舎にあっても篤実に「好奇心」を保ち続けようとした「教養人」の再生なくしては、今日の「高学歴無教養社会」からの脱却はなしえまい。「スキル」習得の以前に「知的好奇心」こそを涵養しなくては、「国語力」どころか「学力」のそのものの獲得などあり

えないのである。

挨拶もできない大学生

筑波大学は学舎がオープンである反面、どこか人間関係が作りにくい面があるのも事実である。ことに研究室という「共同体」がない文系は、異世代が共に「暮らす」環境からほど遠い。そのためか「ヌー・パスッ・スー族」の出現率も高いようである。「ヌー」族とは、国語学者菊池康人氏の、一言も発せずレポートを置いていくような東大生への命名である。

わが学系室でも、いい年をしてときおり「ボーッ」と立っている学生を見かける。仕事をしている事務官に向かって何と話しかけて良いのかわからないようである。私の研究室にも、時にコートも脱がずに飛び込んできて自分の用件だけをしゃべりまくり、いい加減言わせたところで、こちらに「君は誰？」と切り返され、はいそれまでという学生もいる。

もしかして、彼らに若いのだから「無礼」でいいのだとか、大学は民主的学問の場だから皆「オトモダチ」でいいという風潮が蔓延しているとしたら、その責任は「教育」する側にあると言えはしないだろうか。学生に「話す」力を期待する以前に、大学が社会人になるための

「教育」を施さなくては、彼らが持ち得ていないのも無理はないのかもしれない。大人になると言うことは、「場」に「似つかわしい」言語活動ができるようになることと同義である。「話す」力とは、日常生活で「話せる」ことで事足れりではない。「場」に応じた語彙を的確に選択して、相手に自分の考えを「話せる」ことが大切なのである。私の周辺でも「大学の先生のくせに挨拶一つ満足に言えない」という陰口をよく耳にすることからも、そのことは解る。

筑波大学では、環境の点からも社会で求められる「話す」力の育成をするには、教官と学生が意識的に「場」づくりを行わなくてはなるまい。そしてその「場」には、落語の「小言幸兵衛」のように口やかましく若者に言い聞かせる年長者・異世代代表者に徹する人がいることも求められるのである。「社会と連携する教育」は、学問の面からだけでなく生活の面からも見直す必要がありそうである。

異世代との交流を厭う学生たちと教員があえて交わり、しかも小言まで言うのはまことに骨の折れることである。ただそうした教員の覚悟もなくては、彼らに「話す」力を養成することは難しいかも知れない。

社会に通じる「ことば」の力があるとは、まず社会に通じる「人間」の力が身につけていることでもある。私はせめて講義の始まりに、先ずいづまいを正して学生に「挨拶」し、彼らにそれを気づかせようとしているものの、なかなか道は険しい。

おわりに

大学での「ことばの教育」と言うと、外国語教育にばかり目が向きがちである。国際化した学術世界で、その運用能力が求められるのは至極当然のことである。しかし、学問における発見や創造は、まず「自分のことば」によって「考えられ」「書け」「話せ」るべきでなかろうか。

白川英樹博士は「セレンディピティ (serendipity) <偶然からものをうまく見つけだす能力>」には、「偶然に出会った人が新鮮な好奇心や深い認知力と洞察力などに富んでいることは不可欠」だと説く。私は、学生にそうした能力を身につけさせるため、たんなる「日本語」の知識にどまらず、発想のための「ことば」となる「国語」を講義するよう努めているつもりである。

(いしづかおさむ 日本近世文学・国語教育)